「円」と「縁」：ふたつの御「エン」を大切にする生き方

対談：岩國　哲人氏、岡本　和久

前月号に続き、岩國哲人先生(以下、岩國さんとお呼びさせていただきます)との対談です。岩國さんはこのたび、旭日重光章を叙勲されました。長年にわたる金融界、地方行政、国政への大きな貢献がこのような形で認知されるのは、私個人としてもとてもうれしいことです。心よりお祝いを申し上げるとともに、これからも益々、ご活躍されることを願っています。

岩國さんは,1971 年に私が入社した日興證券の大先輩です。私は国際金融部に配属になりましたが、当時、岩國さんはパリの支店長等をされており、その活躍ぶりは東京オフィスにいた若造の私にとって本当に憧れの存在でした。その後、岩國さんは外資系証券会社で活躍され、出雲市長に転身され、さらに、国政に打って出られ衆議院議員として活躍をされました。現在は米国シカゴに居を移され、グローバルな視点から様々な提言活動を活発にされています。今回は米国インベストメント・バンカーとの息詰まる交渉など、知られざる金融史の秘話を紹介していただきました。

岩國哲人（いわくにてつんど）氏プロフィール
77 歳。日興證券、モルガン・スタンレイ投資銀行、メリル・リンチ社日本法人の社長・会長などを経て 1989 年、出雲市長に就任。「行政は最大のサービス産業」の持論をもとに、ショッピングセンター内に行政の土・日サービスコーナーを設置するなど多くの行政改革を実行。1996 年、衆議院議員に当選、連続 4 期を務める。日本の関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科の客員教授のほか、米国・バージニア大学、中国・南開大学、韓国・東西大学の客員教授を務める。現在は米国シカゴに居を移し、幅広い政策提言活動などを行っている。

＜米国は国名を変更すべき＞

岩國｜アメリカの話に戻りますが、岡本さんも私も、日本を外から眺めるチャンスを与えられた。外から見ると日本の良さも弱さもよく見える。だからこそ、頭を 2 倍、3 倍使わなければいけない。若い頃からそのような経験を積んできた。しかし、日本国内にはそのようなチャンスを与えられていない人たちがたくさんいる。その人たちにそれを早く伝えてあげる、そして我々と同じような、あるいは我々以上の能力を持っている人にそのメッセージを投げかける。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
発行人：岡本和久、発行：I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
URL: http://www.i-owa.com；E-mail: info@i-owa.com

それは日本という一体感のある国だからできる。世界の中でもこれだけ一体感のある民族は少ない。我々日本人の仲間では、安心して思ったことを話せる。それはアメリカでもなかなかできないことです。アメリカは未だに「ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカ（USA）」という名前です。私はオバマの選挙事務所に 2 回行き、その度にオバマのブレインに対してこれからも「ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカ」と言い続けるのですかと質問したのです。ステイツと言うのは、多くの州が一緒にやろうという意味です。しかし、世界の国はアメリカ国内で州として一緒にやろうということには関心を持っていない。州が分かれているという事は、世界の国ではそれほど重要ではなく、重要なのは、アメリカという国です。なぜ未だに「ユナイテッド・ステイツ・オブ・アメリカ」なのか。今、アメリカが直面している問題点は、人がいろいろな国からアメリカに集まっていることです。そして平等の権利を与えられている。それはいいことだ。しかし、所得格差、教育格差、安心の格差、社会保障、いろいろなところから同じ国民でありながら、日本ほど一体感がない。一体感のない社会がいろいろな点で格差を広げる要因になっている。私は同じ「USA」でも「ユナイテッド・ソサエティーズ・オブ・アメリカ」に国の名前を変えるべきだと言っている。「Change」「Change」と言い続けて当選したオバマだったらそれぐらいのことを言うべきだ。「私は二期目を再選された。USA を新しい USA に変えてみせる」、そのメッセージは世界的に大きく広がるだろう。なぜならそれはどこの国も抱えている問題だからです。

岡本｜なるほど。様々な社会の層が統合されるという意味では、アメリカだけではなく全世界に共通のメッセージとなりますね。

岩國｜それから私はオバマが仕事をしている「ホワイト・ハウス」。なぜホワイト・ハウスなのか。今まで白い人だけが大統領になってきた。ホワイトでない人でも大統領として仕事をする時代に大きく変わったアメリカは、ホワイト・ハウスと言う呼び方をやめるべきだと思う。そういう人種を象徴するかのような表現をアメリカは未だに使っている。世界はひとつになろうとしている今日、1 つの人種だけを象徴するような呼び名の場所で大統領が執務するのはおかしい。

岡本｜確かにアメリカでお住まいの岩國さんですから、「ホワイト」という言葉が単に多くの日本人が思うように「白い」というだけでは無い意味合いを持つ事をお感じになっているのでしょう。私もそれはよくわかります。そのような名称が未だに続いているというのも本当はおかしいですよね。また、アメリカの場合、連邦国家と州との関係というものも歴史的にも非常に微妙なものがあります。銃規制一つとっても、あれほどもめるわけですからね。しかしまた私はアメリカというのは、今から 100 年か 200 年経って世界国家ができたときに、歴史家はあのアメリカは世界国家の始まりだったというような位置づけをすることになるのではないかとも思っています。いろいろな人種、いろいろな宗教、いろいろな国民性を背負いながら皆がやってきてアメリカという平等な舞台の上でチャレンジをし、成功する人も失敗する人も

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

出てくる。みんなで共通のリーダーを決めてその人のもとで国家としてのまとまりを持つ。私は若い頃からアメリカとの関わり合いが多いので、何かそこに夢をかけたい感情があります。一方で、アメリカという国家が各州全体を支配しようとすればするほど、その中で州というローカルな存在にしがみつきたがる人も多いことでしょう。これはそのまま、グローバル化が進む中で、国という単位にしがみつきたい人も決して少なくないのと同じことだと思います。日本はその良い例だと思います。その辺は世界にとっても、アメリカにとっても、日本人にとっても大きな課題ではないでしょうか。

＜健全だったウォール街の倫理観＞

岩國｜日本が元気だった時、ウォール街から学びとろう、そしていつかチャレンジしよう、そういう時期を我々は体験しましたね。アメリカの市場は自由であると言いながら、ウォール街の大手がコントロールをしていた。いい意味でのコントロールが必要だったのでしょう。むちゃくちゃな、恥知らずなことを行うとウォール街の信頼がなくなる。そのようなことにならないように大手がいい意味でコントロールしようとしてきた。その結果、ウォール街で働いている人たちは結構、自由でお金を尊重しながら、お金を超える倫理観、人生観を持っていました。岡本さんもそのような友人を持っていることだと思います。

岡本｜確かに当然のこととして彼らはチャリティーなどの社会貢献活動を熱心に行っていますね。

岩國｜私が働いていたモルガン・スタンレイ投資銀行などは特にそのような人が多かった。お金は充分あるからこそ、お金を超えた人生の喜びを求めていた。次の会長になると期待されていた副社長が、さっとやめて、お父さんに育てられたケンタッキーの牧場に戻った。次の副社長になることが約束をされていた専務は、自分の奥さんがブロードウェイの女優だった。その奥さんは不幸な子供たちを助けるチャリティー活動をしていた。しかし、自分はウォール街の仕事が忙しいため、奥さんのヘルプができなかった。残された人生の時間を妻のヘルプをしたいということで辞任をしてしまった。そしてある常務は、自分は小さい頃から建築家になることが夢だった。そしてまだ若い 55 歳の時に、会社を辞めてコロンビア大学の工学部に入って建築の研究に没頭した。そういう人たちの生き様を見ながら、お金を超える人生観を持っていることの美しさを感じていた。そんなときに、自分の故郷の先輩や後輩から私のもとに電話がかかってきた。

＜一本の電話、故郷に帰る＞

岡本｜　一本の電話が決意を促したということですね。

岩國｜そうです。出雲に戻り、市長選に出てくれと言うのです。家内が二人の高校生の娘を残して

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

あんなところに戻るのは嫌だと言うだろう」と私は思っていたのですが、そうではなかった。幼いころ彼女の家は私の家から 150 メートルぐらいしか離れていなかった。彼女とは同じクラスで私の斜め前に座っていたのです。その彼女が、「帰ってあげなさいよ」と言うのです。それで私は、ウォール街を去って出雲に戻ったのです。それを決意させたのは、あの当時、ウォール街にあったお金を超えた素晴らしい人生観を持っていた人たちだったと思うのです。岡本さんわかるでしょう。お金というものは、魔力を持っている。人の心を買うことさえできる。だからこそ、お金を超える素晴らしい哲学、思想を持った人間しかその仕事をすべきではない。核兵器ではなく、今は「核兵器」よりも恐ろしい「欲兵器」の時代です。ですから、核兵器も欲兵器もコントロールできる政治家や民間のリーダーがあってこそ世界中の期待に応えることができる。これから何をすべきかということを考える上でもこういう話を岡本さんとできることがとても楽しいですよ。

岡本｜私も岩國さんが出雲市長に就任されたのには大変驚きました。奥さまがそのように背中を押されたのですね。市長に就任されてからのご活躍は多くの方がご存じの通りだと思います。しかし、どのようなきっかけで国政へと移られたのですか？

岩國｜市長を引き受ける時、ニューヨークに残した 2 人の娘のこともあり、故郷への奉仕を早く済ませて経済の世界にもう一度帰ろうという気持ちもありました。それで「4 年間だけ引き受けます。その 4 年間に 10 年分の仕事をしますから・・・」と親しい支持者や議員に話していました。誰も「結構です」という人はいなかったが、はっきりと口に出して反対する人もいなかったのです。私はそのつもりで 10 年分の仕事をしたし、議会もそのように評価してくれていました。しかし、4 年目の終わりが近づいたころ、多くの議員が「一回だけ 4 年間の仕事の通信簿を受けてください。議会も我々も市長と一緒に一生懸命働いてきたつもりです。市民がそれを次の選挙でどう評価しているかという通信簿を・・・」と言い出したのです。通信簿と言われれば決して逃げるような市長ではないとの考えで、私の足もとを見透かしてのアプローチでした。それで 2 期目を引き受けることになりました。

その時に「4 年やるとは約束できないが、それでもいいのですか」と聞く私に、議員たちは「結構です。4 年間という任期はそれ以上長くやってはいけないという意味ですから・・・」と答えてくれた。それで 2 期目の途中、1995 年に、合わせて 6 年間の市長の任務を終えて退任したのです。その最後の議会で、市会議員全員が起立するなかで議長から感謝状をいただきました。私の当初の公約を含め、重要な施策を列挙し、それをすべて実行したことに「出雲市議会は決議をもって感謝の意を表します」とありました。議長が読み上げる感謝状の言葉の一つひとつに、議員と、職員と、市民と一緒に励んできた 6 年間の思い出が走馬灯のように心を駆け巡りました。私にとっては貴重な「卒業証書」です。

＜森羅万象から学べ＞

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本｜金融界において、市長として、そして、国会議員としての岩國さんのご活躍は、お金のために仕事をするというのではなく、仕事そのものに社会性を見出されている気がします。私も見習いたいものだと思います。思い起こすと、私の日興證券の入社式の時に当時の白木小一郎会長が、「君たちは証券会社に入ったのだから、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を、何度も、何度も読みなさい」ということをおっしゃいました。それは、いま思うと大変な見識だったと思います。今日、入社式でそのようなことを言うトップはいるのか、いないのか、私は知りません。しかし、白木会長からのこのメッセージは現代でも十分に通用することだと思います。常にお金の裏側には倫理というものがある。なければいけない。

岩國｜白木会長は三菱銀行から日興證券に来られた方だが、常にお金を超えた倫理というものを大切に考えておられました。恐らく新人に対する期待を込めてそのような事を言われたのでしょう。あの当時、日興證券は、数多くの大変優れた方々がいらっしゃいました。白木会長の前には、湊守篤さんや渡辺省吾さんという大変優れた経済学者であり、かつ、みんなに尊敬されるバンカーを興銀からお招きしています。そして、日興證券の創始者である遠山元一さんがいらっしゃいました。私が入社したころ、遠山さんは会長でしたが、我々新入社員に向かって「森羅万象から学べ」ということをおっしゃった。これも素晴らしい言葉です。もちろん森羅万象という言葉は知っていましたが、すでにそれほどよく使われる言葉ではなくなっていた。まして新入社員に向かって森羅万象などと言う経営者はほとんどいなかった。皆、毎年、毎年の収益目標や利益の金額のみの話をしている人が多かった。遠山さんは私たち若い新入社員に向かって「君たちはこの大事な仕事をするにあたって、森羅万象から学べ」ということをおっしゃった。それは私にはショックだった。そんなにスケールの大きな仕事につけるのかという喜びがあった。

岡本｜最近の風潮を見ていると、ただ学歴や資格を取れば、それで世の中うまく渡っていけるように考えている若者も多いようですが、そんなものではないだろうと思います。まさに森羅万象から学び、世の中で仕事をして散々もまれて学んでいくことが本当の意味でのその人の実力をつけることになるのではないでしょうか。

岩國｜私が勤務をしたメリル・リンチの社長は「お客様から学べ」ということをいつも言っていた。お客様が何を期待しているのか、何を求めているのか、何を心配しているのか、そういうことから学べということを言っていましたが、これは遠山元一さんの「森羅万象から学べ」というのにも通じるところがあると思います。メリル・リンチの基本は代々、「カストマーズ（お客様）・ファースト」でした。しかし、今は、ウォール街は欲兵器に支配されるようになってしまった。そしてカストマーズ・ファーストの気持ちを忘れ、自分がファーストになってしまったのが1985 年ぐらいからではないかと思います。そのころ非常に大きな地殻変動が起こったと思

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

います。アメリカの若い人たちの間で、コンピュータが急速に普及をしだした。それが金融界にも波及をしてきた。その結果としてカストマーズ・ファーストという気持ちが何かどんどん消えていった気がします。

＜二つのエンが切れた＞

岡本｜私の前職の英国バークレイズ・グループも KYC ということを盛んにいっていました。「Know Your Client（お客を知れ）」の略です。恐らくカストマーズ・ファーストと同じような意味だと思います。しかし、ウォール街ではそのような顧客との人間的つながりが薄まったのは事実だと思います。

岩國｜なぜそうなったかといえば、それまではウォール街の証券会社も銀行も皆、お客様の顔を見ながら、目を見ながら商売をしていた。そして投資をするのも、お金を貸すのも、その人がどういう経営者であるかということを常に判断しつつビジネスをしていた。今のウォール街のバンカーはお客様の顔をほとんど見たことがない。スクリーンの数字しか見ていない。要するにスクリーン・ファーストになってしまった。

岡本｜同時に、投資家のほうもネットでの取引が増えれば増えるほど株価しか見なくなってしまっている。プライス・ファーストですね。

岩國｜そう、そう。以前はウォール街のバンカーたちは後輩を育てる時も、どれだけ多く、お客のことを知っているか、お客が何を求めているかというようなことを非常に重視していた。それも分からずにスクリーンを見ながら朝から晩までキーボードを叩いてそれで仕事をしたつもりになっている。そして人間味のある仕事からだんだん離れてしまった。私がウォール街から離れようと思ったのは、直接的には出雲市からの電話だったのだが、その前から心の中でウォール街のあり方に疑問が膨らんでいたのです。心を忘れた人間たちが、お金の世界、ウォール街にどんどん忍び込んできていた。ある意味、金融のテロリスト集団が続々とやってきた。

岡本｜その意味では二つのエンは切り離されてしまった。まぁ、アメリカの場合にはエンではなく、ドルでしたけれど。

岩國｜縁を知らない円が増えてしまった。それまでのウォール街というのは、世界のために大変重要な役割を果たしていた。日本の為にも、ヨーロッパのためにも、ケネディーの失敗にもかかわらず、ドルが基軸通貨として世界経済の活力を補給してきた。良い方向に動いていた。それを支えてきたのがウォール街のバンカーたちでした。しかし、その中にもウォール街の利益を優先する思い上がった人たちが出てきたのも事実です。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本｜岩國さんがウォール街を去られるというのは私にもショッキングな出来事でした。何かその時の思い出を聞かせていただきますか。

岩國｜私がウォール街を去る決意をメリル・リンチ本社に伝えると、会長、社長は最初は驚いていましたが、理由を理解すると心よく、社内外に私の新たな出発を励ますプレス発表をしてくれました。メリルの中での私の実績だけでなく、私が 30 年間、日・米・欧・アラブ社会でどういう仕事をしてきたかが詳しく列挙されていました。メリル本社の上席副社長室が並んでいる 31 階の西南部の廊下、私のオフィスのあったすぐ前の壁には今でもシュライヤー会長と私が 1986 年に外国の金融機関として東京マーケットに一番乗りをした喜びの握手の写真が掛かっています。このプレス発表も私にとっては人生の卒業証書のひとつです。

岡本｜日本の金融業界はずっとウォール街の背中を見ながら何とか追いつこうとしてきました。それは 60 年代から続いてきたのだと思いますが、当初は、彼らから見れば取るに足りないような業者がだんだんと力をつけてくる、その推進役を岩國さんはじめ多くの先輩がたが努めて来られました。その意味ではウォール街を去るというのは特別の感慨もおありだったと思います。最初はかなりご苦労されたと伺っています。

＜君が指揮をとれ、私は責任をとる＞

岩國｜川鉄という会社がアメリカで資金を調達しようとした時のことです。ケネディーの「金利平衡税」によってそれがアメリカではできなくなり、ヨーロッパで債券を発行することに切り替えた。それを日興證券が主幹事となり、シティのヒル・サミュエルという名門会社と共に欧州で資金調達をやりましょうと熱心にアプローチした。日本側のバンカーは日興證券、欧州側はヒル・サミュエルということで川鉄側も了解していた。そこにウォール街から警告が来た。「そういうことをしたらどういうことになるか分かっているのですか」と言うのです。ウォール街で川鉄のために最初に米国内で資金調達をしたのは、ファースト・ボストンだった。「勝手に日興證券がヨーロッパの業者にその話を持っていくようなことをしていいのですか、ウォール街を無視すると大変なことになりますよ」、「使う通貨はどこの国の通貨ですか。円でもない、ポンドでもない。ドルを使って資金を調達するのにウォール街を無視するとどういうことになるか分かりますか」と言うのです。それで遠山副社長とロンドンの支店長代理だった私は、ファースト・ボストンとの交渉にあたることになった。ファースト・ボストンに対しては、「ヨーロッパでやる以上は『郷に入ったら郷に従え』ということも重要だ。ヨーロッパのマーケットを使う以上、ヨーロッパの金融の仕組みを使う以上、たとえドルであろうとも、やはりヒル・サミュエルを墓碑名広告のトップの左側に持ってくるべきだと思う」と私は主張した。

岡本｜墓碑名広告というのは発行に際してシンジケート団の参加者全員の名前を書く広告ですが、

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

その一番上の一番左側と言うのが最も名誉のあるポジションで、そこには非常に厳密な伝統に基づいたルールがあり、これが変わるという事は、金融業界にとっては大変な出来事でもあったのですね。

岩國｜そうです。「決して、日興證券として、あるいは川鉄としてもファースト・ボストンに反感を持っている訳では無い」と、そのような説得も試みました。しかし、彼らは納得しません。「そのような理由は認められない」、「日興證券がどういうことになるのか、よく考えてみろ」と言うのです。今でも忘れません。会議が終わり、エレベーターの所まで見送りに来たアーサー・テーラーというトップはまさにエレベーターのドアが閉ろうしている時に「ファースト・ボストンは日興證券をウォール街からシャットアウトする」と言いました。まさにそのタイミングで言ったのです。そして、本当にエレベーターのドアがシャットアウトした。このような状態だと日興證券もニューヨークの店を閉鎖しなければならないかもしれない。それは大変なことになる。一生懸命みんなで盛り立ててなんとかニューヨークで力をつけつつあるときに閉め出される。これは大きな政治問題にもなりかねない。我々は知恵を絞ってなんとかファースト・ボストンを説得しなければいけない。

遠山副社長がその時言った言葉が「岩國君、これはニューヨークの問題だけれども、君が指揮をとれ、私は責任を取る」でした。これは今でも名言だと思っています。「君が指揮をとれ、私は責任をとる」。最近は「私が指揮をとる、君は責任をとれ」と言う風潮が強い（笑）。そういう経営者は多いけど、遠山さんは逆のことを言ったのです。そこまで言われれば、こちらもベストを尽くさざるを得ない。最終的に私が提案したのは、ファースト・ボストンを墓碑名広告の最上列左側に形の上では持ってくる。しかし、「郷に入っては郷に従え」、ヨーロッパにおけるシンジケートの管理はすべてヒル・サミュエルに行わせる。川鉄に対するデュー・ディリジェンスは、ファースト・ボストンとヒル・サミュエルは共同で行う。それを日興證券がすべてアレンジする。このようにして、みんなの顔が立つような形にした。そして、それが、その後のひとつのモデルになった。こうして第一号は穏やかに日興證券をシャットアウトすることもなく、実現できた。ファースト・ボストンも顔が立った。

岡本｜ 60 年代の終わりぐらいまでは墓碑名広告の中で最上列に名を連ねることができるのは、スペシャル・ブラケット・グループと呼ばれるファースト・ボストン、モルガン・スタンレイ、クーン・ローブ、ディロン・リードの 4 社に非常に厳格に決まっていた。圧倒的な権威をもって、この 4 社は発行市場を支配していた。

岩國｜そうです。大変な力の見えざる締め付けがあった。強烈な支配体制だったのです。逆に言えば、そのような支配をしている以上、何か問題が起これば、その責任はすべてそのリードマネージャーが負うことになる。それが倫理的な面での歯止めでもあったのです。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

岡本｜そのような支配体制の中で、70 年代ぐらいになった頃からリテールの販売力を強烈に持つメリル・リンチ、コマーシャル・ペーパーの市場で強力なゴールドマン・サックス、債券トレーディングに強いソロモン・ブラザーズなどが、スペシャル・ブラケット・グループの牙城を少しずつ崩し始めたのです。

岩國｜よく知っていますね。

岡本｜入社して早々の時期で強い印象に残っています。その意味では川鉄のディールなどは堤防に空いた最初の穴だったのかもしれませんね。ただ単に権威だけではやっていけない時代が少しずつ押し寄せて来ていた。非常に大きな転換点だったのでしょう。

岩國｜下手をしたら大火事になるところだった。とにかく第一号は無事に完成させなければいけない。あれは本当に世界の金融界の歴史のどこにも書いていない事件だったと思います。

岡本｜本当に貴重なお話です。

岩國｜しかし、遠山直道の「ウォール街に屈服してはならない。しかし恨みを持たれてもいけない。ウォール街は大切な存在である」という言葉も素晴らしいリーダーとしての発言だと私は思います。こういう話を、今だからこそ、インベストライフなどで読んでもらえるのは良いことです。岡本さんもそうだと思うけれども、私のように毎日毎日が厳しい競争の中で生きてきた人間にとって、そのような世界の中にいながら、それを超える倫理観、人生観、そして使命感などお金を超える大切なもの、そしてお客様を大切にすることこそ仕事の目的であることを忘れるような人は金融界や証券界で働いてもらいたくないとさえ思います。私は国会の中でも発言して議事録にも残されています。「核兵器」よりも恐ろしい「欲兵器」を、誰がどのような形でコントロールして行くのか、宗教の力を借りるのか、教育の力を借りるのか、核兵器のコントロールも難しいけれども、欲兵器のコントロールはもっと難しい。今日の世界の大きな課題です。

＜人も企業も長寿世界一＞

岡本｜私は何かそのようなものに対する解決策として、農耕民族的な考え方というのが必要なのではないかというふうに思います。アメリカの中でも岩國さんがお住まいのシカゴのような農耕地帯とウォール街では基本的な考え方がずいぶん違うような印象を持っています。種をまき、水をやり、肥料をやり、日に当てて育てていくという、そのような資本主義のあり方がこれから重要なのではないでしょうか。

岩國｜その通りです。農耕民族にとって大切なのは、時間をかけるということです。まさに「時は金

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

なり」。実はこの言葉は二つの意味を持っています。一つは時が利益をもたらしてくれるということ。つまり、他の人よりも早く何かをする。早くすれば、より大きな利益が得られる。同じ時間の中で、より多くの利益を得る。これは大切なひとつの物差しです。

しかし「タイム・イズ・マネー」という言葉にはもう一つ別の意味がある。もっと大切な事は、岡本さんも言っていたように、時間をかけて育ててゆくということがあります。シカゴの金融市場はウォール街よりもはるかにゆっくりと時間をかけて成長してきている。その分、自信を持って育ってきている。若い人をたくさん集めて、コンピュータを使って大儲けをしようというのではなく、失敗をしないためにじっくりと時間をかけて農耕民族的な我慢をして制度を作っていくということを実践してきています。本当にお金の世界に関係する人に、「時は金なり」の二つの意味を理解してもらいたいですね。

岡本｜農耕民族的、あるいは日本的な感性はこれからもっと世界で重要になりそうに思います。私も「アジア的感性を活かした資産運用」を提唱しており、ロサンジェルスや東京外語大、日本 CFA 協会などでも講演をしたことがあります。非常に熱心にみなさん聞いてくださり、こちらが驚くほどでした。

岩國｜世界で創業 200 年以上の企業は 41 か国に 5586 社あります。このうちの半分以上の 3146 社が日本に集中しています。続いてドイツの 837 社、オランダ 222 社、フランス 196 社となっています。韓国には創業 200 年以上の企業はなく、100 年以上も 2 社のみです。日本の場合はさらに創業千年以上の企業が 7 社あり、500 年以上は 32 社、200 年以上は 3146 社、100 年以上は 5 万社余りで、これら長寿企業の 89.4%は従業員 300 人未満の中小企業です。このように長寿企業が多い理由として、本業重視、信頼経営、透徹した職人精神、血縁を越えた後継者選び、保守的な企業運用などがあると思います。私は世界三大都市と言われるニューヨーク・ロンドン・パリなど海外の都市に 20 年以上勤務し、中小企業と大企業を数多く見てきました。その中には中小企業から大企業へ成長した企業が多数あり、伝統を誇り、顧客、取引先の信頼の高い企業には親族で事業を継承してきた企業も多いことも見てきました。金融や投資の世界でもロスチャイルド、モルガン、ソロモン・ブラザーズ、ラザード・ブラザーズなど、社名そのものにも親族継承企業であることが表れています。これからも長寿企業の育成に向け、中核部品の製造技術の研究開発投資に対して税制・金融支援を行う一方、中小企業の成功的な技術開発に対する画期的な補償体系なども必要なのではないかと思います。

岡本｜岩國さんの長いグローバルな体験を活かし、これからも素晴らしい提言活動を続けていただけるように心からお願いしたいと思います。

今日はお忙しい中、貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社